広島大学大学院文学研究科　広島大学考古学研究室紀要　第11号、2020年、53～72頁。　考古学研究室紀要

広島県神石高原町高蓋塚谷古墳の紹介

野島　永・森本直人
藤澤昌弘・下江裕貴

１．はじめに

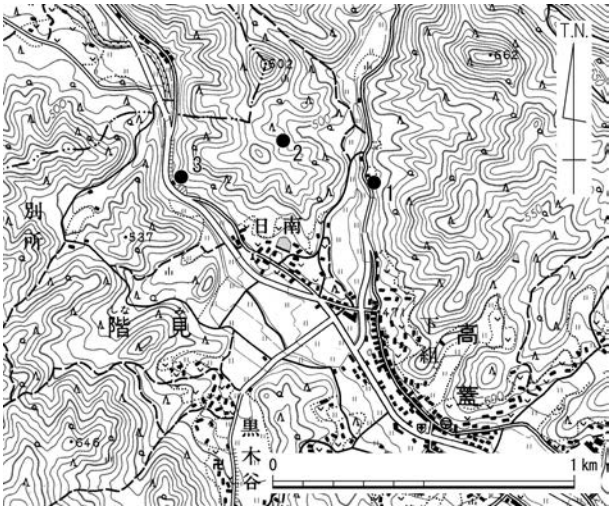
高蓋塚谷古墳は広島県神石郡神石高原町高蓋塚谷（高蓋 5733）、芦田川支流矢多田川の最上流、県道416号三和油木線沿いに所在した。戦後間もない1949（昭和24）年６月頃に、畑地開墾のために発掘され、消滅した。出土した多くの遺物も離散し、これまでわからぬままとなっていた[(1)]。付近には、塚谷古墳の西対岸山腹で須恵器が出土した明神上古墳、５ｍあまりの横穴式石室をもつ塚の鼻古墳が知られているにすぎない（第１図）。

考古学研究室では、2017（平成29）年12月に神石高原町立歴史民俗資料館２階に収蔵されていた須恵器や玉類などが高蓋塚谷古墳の出土遺物の一部であり、それらが古墳の存在した土地所有者の寄贈によるものであることを確認した（神石高原町 2010）。2018年度にはそれらを借り受け、実測・写真撮影を行った。その後、広島県立府中高等学校が所蔵していた高蓋塚谷古墳出土遺物が広島県立歴史博物館に移管されていたことを知り、広島県立歴史博物館との協議を経て一緒に現存資料の紹介をすることとなった。

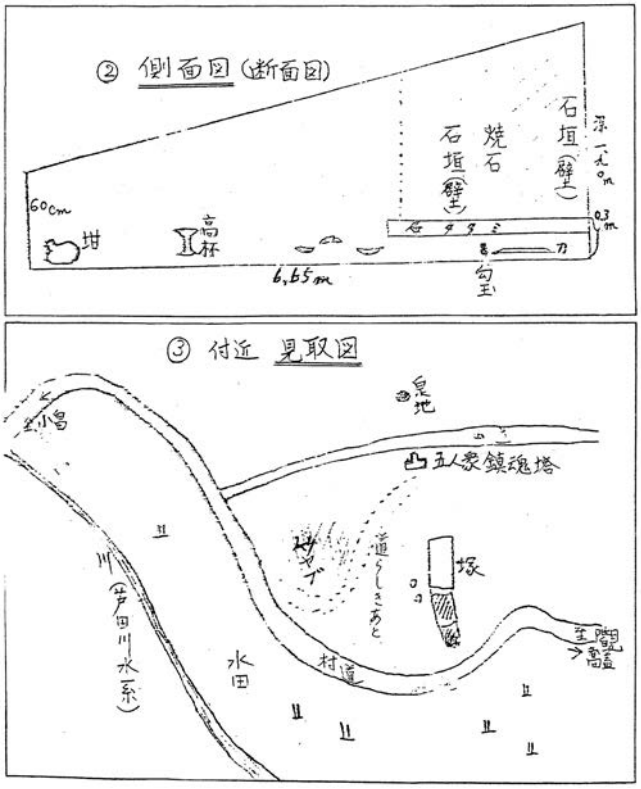
高蓋塚谷古墳の出土遺物については、豊元國氏の集成した広島県の古墳総覧に掲載されている（豊編 1954）。それによると、1948年12月２日に発掘され、「金環・勾玉・管玉・棗玉・切子玉・小玉・直刀・鐔・刀子・矢鏃・轡・鉸具・雲珠残片・飾金具・須恵器・土師器各種」が出土したことがわかる。調査時期に齟齬があるようにみえるが、複数回にわけて遺物の取り出しが行われた可能性も想定できる。

当時発掘したころの状況については、脇坂光彦氏の抄報（脇坂 1978）以外、さしたる文献はなかった。今回、神石高原町に返還された出土遺物とともに、発掘調査時の調査内容を示す当時の私信も借り出すことができた[(2)]。大学院生の藤澤昌弘、下江裕貴らの協力を得て、神石高原町から借り受けた高蓋塚谷古墳の出土遺物、須恵器や玉類の実測・図化と写真撮影を行った。

先述したように、発掘調査を行った豊元國氏が在職されておられた広島県立府中高等学校や府中市教育委員会にご教示をいただき、府中高等学校に保管されていた考古資料は広島県立歴史博物館に一



第１図　高蓋塚谷古墳位置図
（国土地理院「高蓋」1/25,000）
１．高蓋塚谷古墳　２．明神上古墳　３．塚の鼻古墳



第２図　高蓋塚谷古墳の略図（重森孝二郎氏原図か）

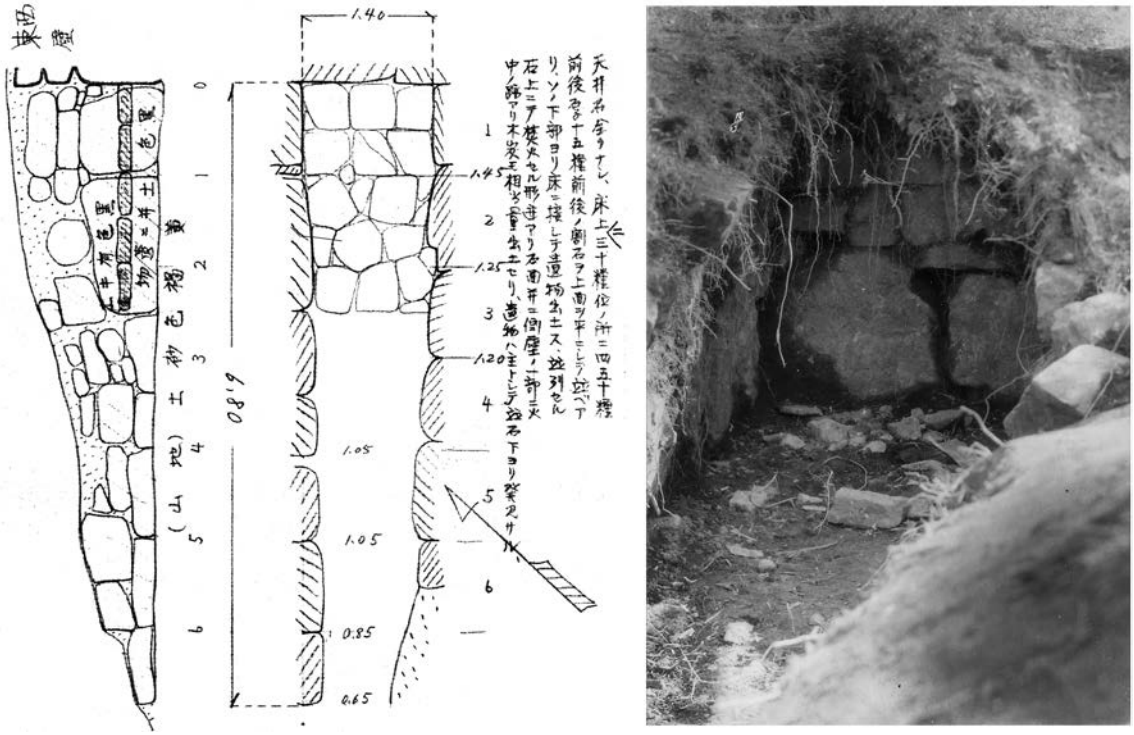
括移管されたことを確認した。広島県立歴史博物館に連絡をとり、再度出土遺物の確認を行ったところ、当時の発掘調査の写真（第３図右・第４図）が見つかり、馬具や鍔などといった金属製遺物の一部も保管されていたことがわかった。このため、広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所学芸員の森本直人氏とともに、現存する出土遺物の報告を行うこととした。豊氏が残した石室実測図などから、高蓋塚谷古墳の石室全長が７m以上になる横穴式石室であることを確認することもできた。

２．神石高原町所蔵遺物

高蓋塚谷古墳の存在した土地の所有者、瀬尾澤代氏が提出した寄贈目録によると、神石高原町に寄贈された出土遺物には、「瑪瑙製勾玉４点、水晶製切子玉５点、碧玉製管玉４点、鉄輪（銅芯耳環）２点、須恵器３点（須恵器坏蓋１・須恵器坏身１・土師器直口壺１）、合計18点」とある（神石高原町 2010）。また、重森孝二郎氏（当時上下高校矢野分校勤務教員）の発掘見学記録「高蓋村に於ける塚見学の感想」[3]、および「昭和24年５～６月（1949年）神石郡高蓋村塚谷古墳見学記録」も、ともに町に寄贈された。脇坂光彦氏の紹介（脇坂 1978）にもあるように、それらの記録からおおよその発掘の状況を知ることができる。それらによると、畑地として塚を開墾した当時にはすでに横穴式石室の天井部はなかったようである。壁面のみ遺存した石室内を掘り進めると「石畳」があり、それを除去すると、「鉄刀・鉄製馬具・勾玉・祝部式土器など」が出土した。石畳上と三方の石室壁面は焼けており、火を焚いた痕跡があったようである（第２図上）。後述する豊元國氏の実測図（第３図左）にも黒色土と遺物の包含層の上に板石が貼り込まれた様子がうかがえる。板石のある部分の北側壁体の基底石は大振りなもので、幅1.5～1.0m、高さ１mほどあった。基底石や奥壁がかなり大型化していた様子を窺うことができる。それより南西側の基底石とは異なる。すでに天井部や奥壁の一部、前庭部周囲は失われていたと思われることから、壁体上半は改変が加えられた可能性もあろう。　　（野島）

３．府中高校地歴部の考古資料の一括移管について

豊元國氏は1938（昭和13）年３月に國學院大學文学部国史科を卒業し、1940年４月に旧制広島県立府中中学校に教師として採用された。1948年、学制改革により広島県立府中高等学



第３図　高蓋塚谷古墳石室略図（豊元國氏原図）**と石室写真**（南西から撮影）

校となった後も、1970年４月に退職されるまで、社会科教員として一度の転勤もなく同校に奉職した。

1941年、豊氏は社会科研究部を創設され、1948年頃に地歴部と改称し、部員の学生とともに広島県内遺跡の調査研究にあたられた。豊氏と府中高校地歴部員による業績は枚挙に暇がないが、発掘調査では、旧石器時代研究の先駆的調査といわれる県史跡宮脇遺跡、備後南部の弥生時代後期の指標となる「神谷川式土器」を発見した県史跡神谷川遺跡などが挙げられる。また、『広島県の考古学的基本調査』や『広島県古墳総覧』第一輯・第二輯などを刊行し、それまで無かった広島県内の考古学的基礎資料をまとめあげた。府中高校地歴部の活動は広島県の考古学研究の礎を築き、調査で収集した多数の考古資料は広島県の歴史を考えるうえで欠くことのできないものである。

府中高校所蔵の考古資料は、豊氏が中心となって行われた発掘調査や踏査によって収集された約12,000点にのぼる[(4)]。広島県立歴史博物館へ寄贈される以前、これらの資料は府中高校で保管されたほか、広島県立歴史博物館、広島県立歴史民俗資料館、福山市しんいち歴史民俗資料館、三原市歴史民俗資料館に貸し出されていた。その後、府中高校から寄贈の申し出を受けた際、関係機関内で協議を行い、一施設が一括管理することで合意に至った。このため、2014年に広島県立歴史博物館へ寄贈された。

広島県立歴史博物館に一括保管された高蓋塚谷古墳に関する資料としては、鉄刀鍔１点、瓢形環状鏡板付轡１点、鐙金具（鉸具・兵庫鎖・吊手金具）１連、須恵器坏蓋３点、須恵器短頸壺１点、須恵器片８点がある。豊氏の石室実測図（平面図・側面図）１葉（第３図）、

第４図　高蓋塚谷古墳出土遺物（1949年撮影）

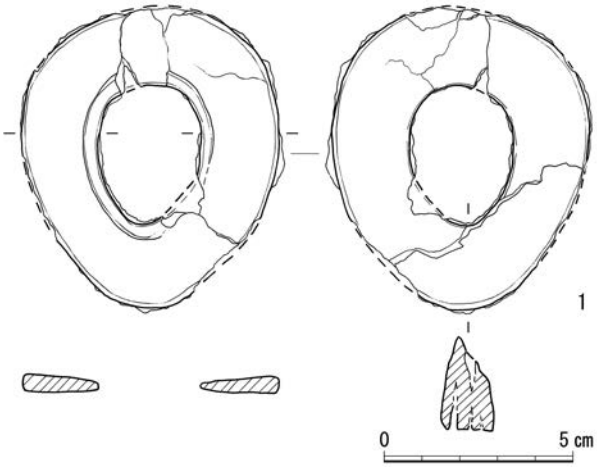
出土遺物実測図15葉も一緒に保管されている。それには、鉄刀鍔１点、瓢形環状鏡板付轡２組、兵庫鎖２連、雲珠１点、辻金具３点（菱形１・長方形２）、鉸具２点、鉄鏃28点（広根系鏃５・長頸鏃23）、刀子４点、土師器直口壺１点、土師器高坏１点、須恵器脚付長頸壺１点、須恵器短頸壺２点、須恵器無頸壺１点、須恵器瑳２点、須恵器無蓋高坏１点が手慣れたタッチで描かれていた。耳環と玉類は１葉に描きこまれており、銅芯耳環２点、瑪瑙製勾玉７点、水晶製勾玉１点、碧玉製勾玉１点、碧玉製管玉７点、水晶製切子玉７点、碧玉製棗玉１点があったことがわかる。このほか図はないものの、玻璃（ガラス）製小玉が33点（濃青色５、淡青色13、抹緑色３、黄色２、長径2.8～1.2分（8.5～3.6㎜程度））あることも記述されておられた。さらに豊氏撮影と考えられる２葉の写真（第３右・４図）も同封されていた。

（森本・野島）

４．高蓋塚谷古墳の出土遺物（第１・２表、写真図版第１下～５）

先述してきたように、神石高原町立歴史民俗資料館に所蔵された出土遺物と広島県立歴史博物館に一括移管された出土遺物を合わせれば、鉄刀鍔１点、瓢形環状鏡板付轡１組、鐙金具（鉸具・兵庫鎖・吊手金具）１連、耳環２点、瑪瑙製勾玉４点、水晶製切子玉５点、碧玉製管玉４点、土師器直頸壺１点、須恵器坏蓋４点、須恵器坏身１点、須恵器短頸壺１点、須恵器片８点となる。発掘調査当時､おそらくは重森氏らが撮影したと思われる写真（第４図）には、少なくとも、鉄刀２振り、瓢形環状鏡板付轡２組、兵庫鎖２連、鉄鏃10数点、刀子数点、不鮮明だが勾玉・管玉・切子玉・棗玉など30点ほどの一連とされた装身具、土師器直口

壺１点、土師器高坏１点、須恵器蓋坏それぞれ13点と17点、高坏（有蓋２、無蓋１）、短頸壺３点とおそらくは蓋２点、無頸壺１点、瓌２点、脚付長頸壺１点、平瓶１点が確認できる。出土遺物として保管されていた鉄鍔は豊氏の実測図に記載されているものの、この写真では確認できない。鉄鏃やガラス小玉などもそのすべては確認できない。おそらくはこの写真のほかにも遺物が遺存していたとすべきだろう。以下に現状で公的機関に保管されていた出土遺物の詳細について述べておきたい。



第５図　高蓋塚谷古墳出土鍔（S=1/2）

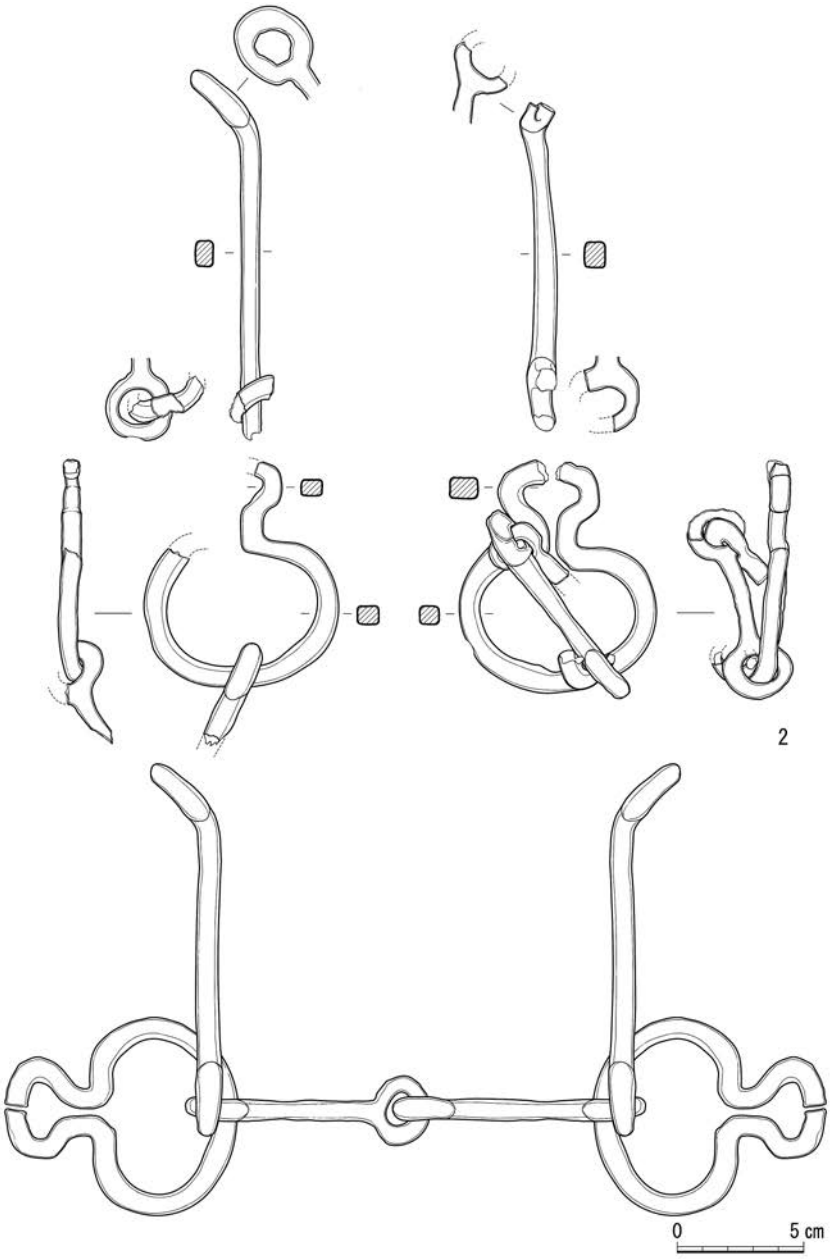
（１）鉄製楕円板鍔（第５図１、写真図版第２上〈広島県立歴史博物館所蔵〉）

錆化により厚みが膨張しているが、全長8.0㎝、重量25.5ｇとなる。平面外形、内孔ともに倒卵形に近い。平面図左側、切羽に当たる内孔周囲のみが一段薄くなり、復元厚3.0㎜以下となる。外縁はやや厚く、上端で復元厚4.5㎜程度、側辺上位で4.0㎜を超え、内側に向かって薄くなる。下半は、クラックが入り、錆化によって３～４枚に剥離し、膨張していた。おそらくは鉄板を倒卵形に成形して下半で上下に合わせて鍛接したと思われる。（野島）

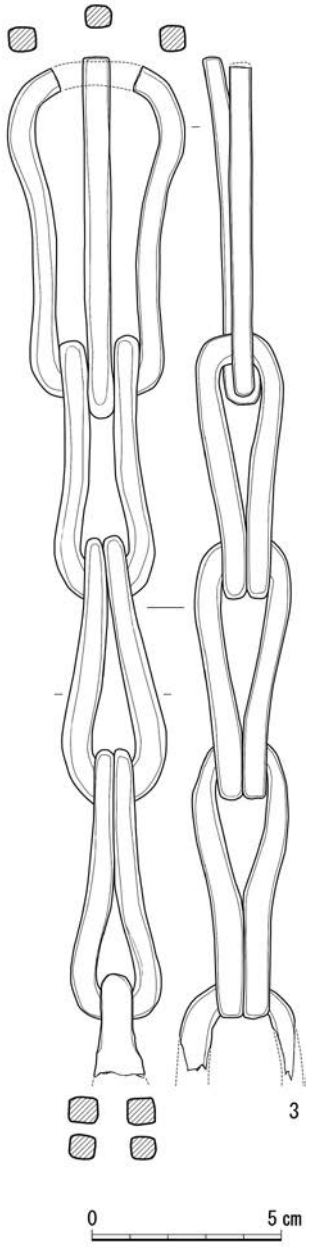
（２）瓢形環状鏡板付轡（第６図２、写真図版第２中〈広島県立歴史博物館所蔵〉）

環体の一部を屈曲させて立聞を作り出した瓢形環状鏡板付轡である。全体的に錆化が進行し、クラックが多数入っている。鏡板は0.8～1.1㎝角の断面隅丸方形の鉄棒を用い、立聞部分で鉄棒の両端部が接するように折り曲げている。鉄棒の両端部は近接しているが、鍛接はしていないと考えられる。右鏡板は立聞も含めた全長9.2㎝、最大幅7.85㎝、左鏡板は同全長8.9㎝、最大幅7.75㎝を測る。銜は二連式で、右鏡板に完形で残る１本の長さが9.1㎝、推定全長は18.0㎝前後と考えられる。引手は手綱側を25°ほど「く」の字に曲げている。右引手が残存長13.0㎝、左引手が全長14.7㎝を測る。銜・引手も断面隅丸方形の鉄棒を用いるが、環はいずれも鍛接している。連結方法は、銜先環に鏡板と引手を連結させる銜介在型連結（大谷 2008）に該当する。右側では、銜先環に鏡板と引手の環の一部が連結した状態で残る。左側では、鏡板と引手の両方に欠損した銜先環が連結した状態で遺存する。

なお、保管されていた豊氏の実測図には、２組の瓢形環状鏡板付轡が描かれている。そのひとつは上述のものであるが、実在が確認できなかったものが他にひとつある。実測図からみれば、右鏡板は立聞も含めた全長9.0㎝、最大幅7.0㎝、左鏡板は同全長9.1㎝、最大幅7.2㎝を測る。銜は同じく二連式で、右鏡板に連結する１本の長さが9.2㎝、左鏡板に連結する一本の長さが9.1㎝となる。引手は手綱側をわずかに「く」の字に曲げている。右引手が全長18.5㎝、左引手が全長17.5㎝を測る。連結方法は、鏡板に銜先環と引手の環を連結させる鏡板介在型連結（大谷 2008）として図化されていた。（森本・野島）



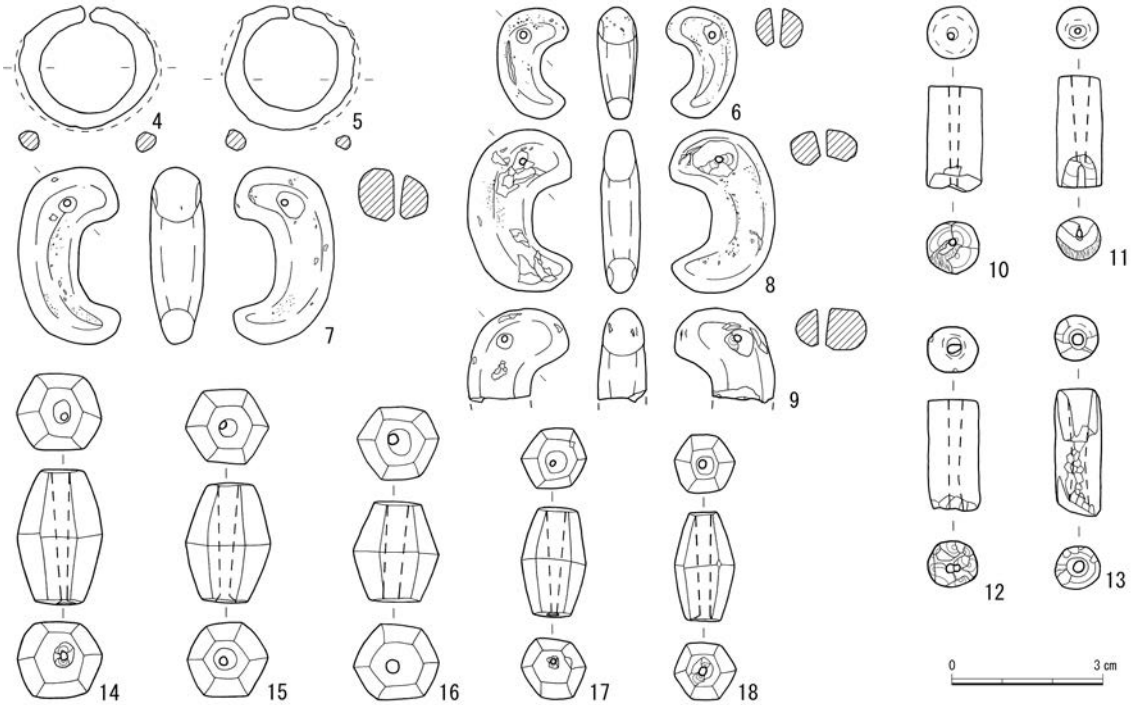
第６図　高蓋塚谷古墳出土轡およびその復元図（S=1/3）



第７図　高蓋塚谷古墳
出土鐙金具（S=1/2）

（３）鐙金具（鉸具・兵庫鎖・吊手金具）（第７図３〈広島県立歴史博物館所蔵〉）

鉸具と兵庫鎖、および鐙の縁部分を装飾する吊手金具から構成され、いわゆる木芯金属張三角錐形壺鐙に付随するものと判断できるが、全体的に銹化とクラックが著しい。特に遺存状態の悪い鉸具は革紐との連結箇所付近で大きく破損しており、本来の形状は大きく損なわれている。兵庫鎖は幅約0.7cm を測る断面隅丸方形の鉄棒を折り曲げ、全長7.0cm ほどの鎖を３連に形成している。吊手金具については兵庫鎖との連結部分を除いて欠損しており、本来の全長や鋲数等は不明である。（藤澤）



第８図　高蓋塚谷古墳出土耳環・玉類（S=2/3）

（４）装身具（第８図4～18、写真図版第５下〈神石高原町所蔵〉）

耳　環（4・5）　環表面のクラック内部に緑青を確認できるため、銅芯を用いて製作したものであることがわかる。表面の装飾方法には水銀アマルガムにより鍍金を施す方法と銅芯に金箔や銀箔を貼りつける方法（渡辺 1997）があるが、本古墳の資料は遺存状態が著しく悪いものの、通例の箔貼りと考えられる。両者とも法量がほぼ同一なことから、一対のものと考えられる。

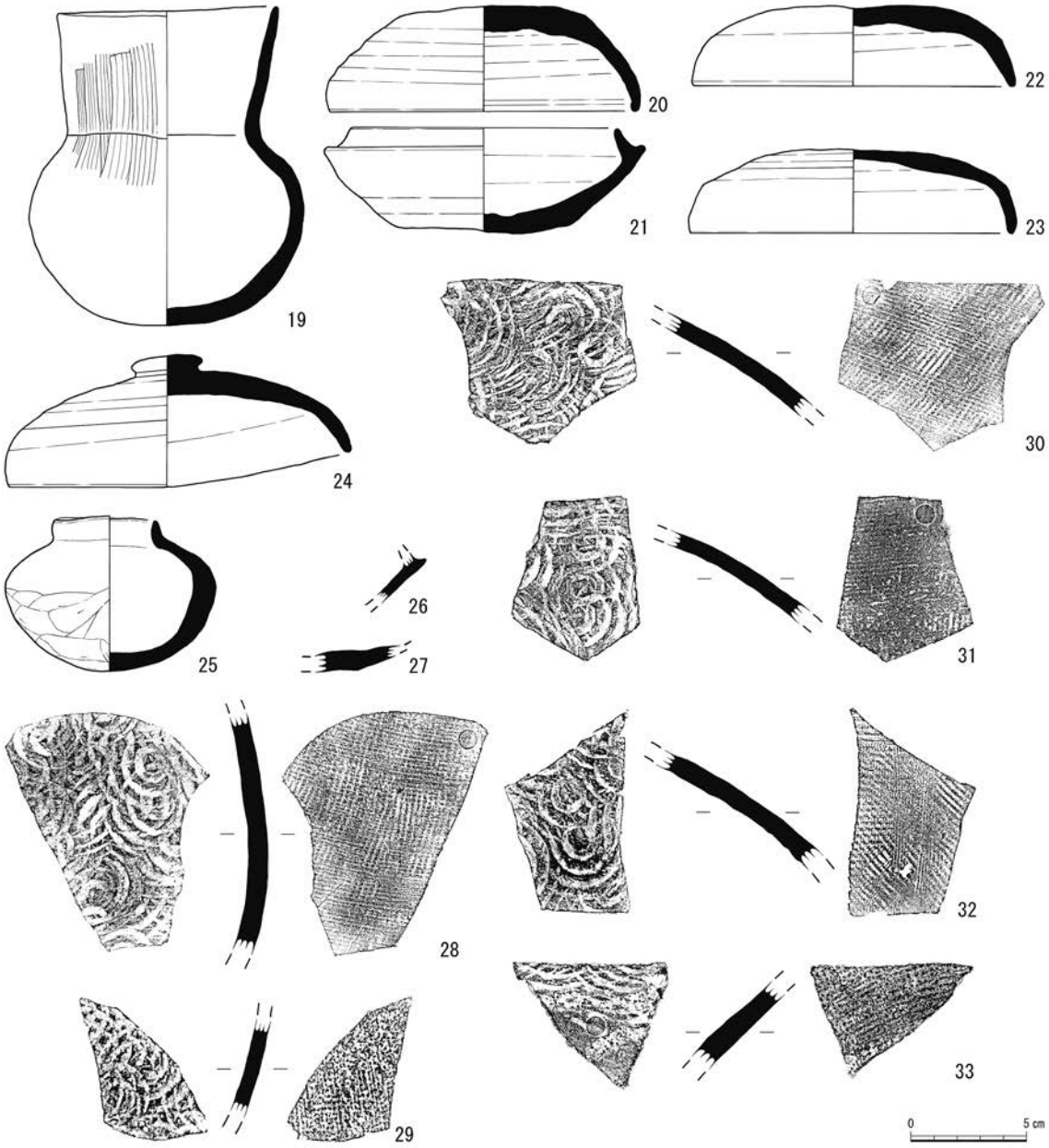
勾　玉（6～9）　全て瑪瑙製であるが、不純物を多く含んでおり、色調の個体差が大きい。全て片面から穿孔しているが、裏面から導き穴を穿つことによって貫孔しやすくしている。管玉や切子玉に比べて丁寧な研磨が施されてはおらず、整形時の敲打痕や剥離痕がかなり明瞭に確認できる。

管　玉（10～13）　10～12は碧玉製で、下端部が部分的に欠損しているが全長が残存しており、法量は酷似している。10と11は上端部から片面穿孔を行っている。12は下端部から穿孔を試みたものの中断し、上端部から再び穿孔を行っている。いずれも全体的によく研磨しているが、10と11は下端部のみ擦痕が確認できる。下端部の欠けた部分を再研磨して使用している。13のみ石材および穿孔方法が他と異なり、緑色凝灰岩製で両面穿孔を行っている。

切子玉（14～18）　全て水晶製で片面穿孔を行っているが、法量に個体差がある。14・17・18は穿孔時の割れ円錐を放置したまま完成させるが、15と16は割れ円錐の部分もよく研磨している。全体的に丁寧に研磨されており、擦痕もほとんど確認できない。　（下江）

（５）土師器（第９図19、写真図版第２下〈神石高原町所蔵〉）

直口壺（19）　外面は粗い目の原体を用いたハケを施しているが、その後、胴部内外面を不定方向にナデて仕上げているため、ハケメは頸部から胴部上半にかけて部分的に残るのみである。頸部および口縁部内外面は横方向にナデられている。５㎜程度の白色鉱物を多く含んだ胎土を使用しており、焼成は良好である。器高に対する口縁部高が40％前後となり、TK 43段階期に通有にみられる形態を示している（秋山 1988、中久保 2018）。なお、第４図では鉄刀の後列に写っている直口壺と同一であろう。



第９図　高蓋塚谷古墳出土土師器・須恵器（S=1/3）

（６）須恵器（第９図20～33、写真図版第３～５上）

坏　蓋（20〈神石高原町所蔵〉・22～24〈広島県立歴史博物館所蔵〉）　坏蓋は全て天井部と口縁部の境に稜がなく、口縁端部内面の段も消失した段階のもので、全体的に丸みを帯びたプロポーションをしている。ただし、天井部に回転ヘラケズリを施さないもの（20・22）と施すもの（23・24）という調整方法の差異によって大別できる。20・22の天井部は不定方向の静止ヘラケズリのみで、内面全体と口縁部外面には弱い回転ナデが施されているため、粘土紐を内から外へ時計回りに巻き上げて成形した痕跡が明瞭に残る。両者ともに３㎜以下の白色鉱物を含んだ胎土を使用し、焼成が悪い。なお、20は第４図の最前列左端に写っている坏蓋と同一で、21の坏身とセットであると考えられる。23は天井部の約３分の２にかけて内から外へ反時計回りの回転ヘラケズリを施し、口縁部外面と内面全体には丁寧な回転ナデを行っている。粘土紐の痕跡は不明瞭だが、内から外へ時計回りに巻き上げて成形している。24はつまみが付いており、高坏の蓋である可能性が高い。天井部の約４分の３にかけて内から外へ反時計回りの回転ヘラケズリを施したのち、内外面全体をナデ調整して最後につまみを付けている。そのため、粘土紐の痕跡は明瞭ではないが、内から外へ時計回りに巻き上げて成形している。23・24ともに非常に緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。

坏　身（21〈神石高原町所蔵〉･26〈広島県立歴史博物館所蔵〉）　21は20の坏蓋と調整や胎土、焼成が共通しているため、セットであると考えられる。底部は不定方向の静止ヘラケズリのみで、体部から口縁部の外面と内面全体には弱い回転ナデを施しているため、粘土紐を内から外へ時計回りに巻き上げた痕跡が明瞭に残る。３mm 程度の白色鉱物を含んだ胎土を使用し、焼成が悪い。なお、21は第４図の最前列の左から２もしくは３つ目の坏身と同一である可能性が高い。26は坏身の受部と考えられるが、細片のため、全形や調整は不明である。１㎜程度の白色鉱物を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良い。

短頸壺（25〈広島県立歴史博物館所蔵〉）　外面は底部から胴部にかけて不定方向の静止ヘラケズリを施したのち、胴部上半から口縁部をナデている。内面は口縁部から胴部上半まではナデており、内面全体と頸部外面の屈曲部には赤色顔料を塗布している。１～２㎜程度の白色鉱物を多く含む胎土を使用し、焼成は普通である。なお、第４図では鉄刀の後列の左から２つ目の短頸壺と同一であろう。

平　瓶（27〈神石高原町所蔵〉）　外面は回転ヘラケズリを行ったあと、底部にカキメを施して内面はナデている。１㎜程度の白色鉱物を含む胎土を用い、焼成は良好である。細片で全形が不明なため、堤瓶の可能性も残る。

甕（28・30・31・33〈広島県立歴史博物館所蔵〉・29・32〈神石高原町所蔵〉）　30・31・32は肩部、28･29は胴部、33は底部の破片と考えられる。全て外面にはタタキの工具痕が残り、タタキのあとカキメを施してから部分的にナデている。内面には同心円状の当て具痕が明瞭に残っている。胎土はいずれも２㎜以下の白色鉱物を含み、肩部の30・31・32と胴部の28は焼成が良好だが、29・33の焼成はやや悪い。（下江）

５．遺物の特徴とその年代

これまで各遺物の特徴を紹介してきたが、本節では編年の指標となる特徴的な遺物を取り上げ、その概略を示しておく。

（１）瓢形環状鏡板付轡

先行研究により、瓢形環状鏡板付轡はTK10型式段階に出現して、TK43からTK209型式段階に盛行、TK217型式段階に衰退することがわかっている（大谷 2008）。そのなかでも鏡板に銜先環と引手の環を連結させる鏡板介在型連結はTK10型式段階にすでにあり、銜介在型連結の轡はTK43型式段階に出現する。また、TK209型式段階以降は環高８㎝以下になる鏡板の小型化や、鉄棒を曲げただけで鍛接を行わない環を持つ蕨手引手の出現を編年指標として挙げている。

広島県内では、高蓋塚谷古墳のほかに東広島市蛇迫山古墳（河瀬編 1989）と三原市銭神第４号古墳（梅本編 1987）で瓢形環状鏡板付轡が出土している。蛇迫山古墳では、横穴式石室内部から須恵器、鉄刀、刀子とともに出土している。共伴した須恵器はTK43型式段階であり、６世紀後半の年代が与えられている。蛇迫山古墳例は大半が部品ごとに分離しているなかで、銜先環と引手の環が連結した状態で認められるため、銜介在型連結の可能性が高い。連結方法のほかに、立聞部で鉄棒両端は接するが鍛接しない点、銜と引手の環は鍛接する点など、高蓋塚谷古墳例と類似する部分は多い。しかし、引手の形状が蛇迫山古墳例は直柄、高蓋塚谷古墳例は「く」の字形で異なっている。銭神第４号古墳例は、周濠から単独で出土したが、近接する第３・５号古墳の状況によって７世紀代に推定されている。連結方法は鏡板介在型連結である。鏡板は他２例に比べて、かなり長細い形状である。加えて、立聞部の鉄棒両端を鍛接している点や、銜と引手の環が蕨手である点など、他２例と異なる点が多く認められる。以上のことを踏まえると、高蓋塚谷古墳の瓢形環状鏡板付轡はTK43からTK209型式段階に比定される。（森本）

（２）鐙金具

鐙の編年について検討した斎藤弘氏（斎藤 1986）によれば、鐙金具は新相へ近づくに連れて兵庫鎖の連接数が減少する一方で鎖そのものは長大化し、本資料のような３連構造の兵庫鎖は概ね６世紀代に収斂する。高蓋塚谷古墳の近隣地域にて兵庫鎖の鐙鞋が出土した古墳としては、庄原市の金田第２号古墳（新井 1999）や福山市の二子塚古墳（畑・高田・小野 2006）が挙げられる。両古墳ともに築造年代についてはTK209型式段階、６世紀末から７世紀初頭と捉えられている。図面上での計測値は２連構造の金田第２号古墳が約９cm、３連構造の二子塚古墳が約８cmであり、上記の変遷観も踏まえれば、本資料は同段階か若干先行する段階に位置付けられる。また尾上元規氏は斎藤氏の編年案を援用しつつ、壺鐙を大きくＡ群（６世紀中葉前後）、Ｂ群（６世紀後半から７世紀前葉）、Ｃ群（７世紀中葉）の３群に分類しており、本資料については尾上氏が定義するＡ群からＢ群に該当する（尾上 2002）。加えて尾上氏は瓢形環状鏡板付轡と木芯金属張三角錐形壺鐙の組成についても言及しており、高蓋塚谷古墳における馬具の組成状況はTK43型式段階からTK217型式段階の組

成に該当する。本資料は重要な編年指標である吊手金具部分を大きく欠失しているものの、上記の轡の時期も踏まえれば、概ねTK43型式段階からTK209型式段階に位置付けられる。（藤澤）

（３）玉　類

玉類についても法量や石材、穿孔方法などによって、おおまかな時期や製作地を推察できる。勾玉は全て瑪瑙製で、形態的には研磨が不十分なため、稜が残って角張っている。片面穿孔を行い、割れ円錐の部分は未調整であることから、本古墳の勾玉は古墳時代中期後半から後期の山陰系にあてはまる（大賀 2009）。管玉のうち、10～12は石材が碧玉で、法量は大賀克彦氏による分類（大賀 2009）のうち、領域JFa類に属しており、片面穿孔を行っていることから、古墳時代後期前半の山陰系の管玉にあてはまる（大賀 2009、米田 2009）。13のみ緑色凝灰岩で、法量は領域Ｆ類に属するとみられる（大賀 2013）。また、両面から穿孔される管玉は古墳時代後期にはほとんどみられないため（米田 2009）、13は他の管玉より古い時期のものである可能性がある。切子玉は全て石材が水晶で、領域Ｓ類に属する長さ20㎜以上の大型品であることから、古墳時代後期後半の山陰系となる（大賀 2009）。このように、本古墳出土の玉類は13の管玉１点を除き、古墳時代後期に出雲地域で製作されたものとみてよいだろう。

（４）須恵器

須恵器の坏蓋のうち、20は口径13.2㎝、21は口径11.6㎝と比較的小さい。さらに、天井部と口縁部の境の稜や口縁端部内面の段が完全に消失していること、坏身の立ち上がりの高さや角度が低くなっていることから、両者は陶邑編年（田辺 1966）のTK209型式古段階にあてはまる。22・23・24は口径が14㎝前後と若干大きいが、天井部と口縁部の境の稜や口縁端部内面の段は完全に消失していることから、陶邑編年のTK43型式段階にあたる（田辺 1966、中村 2001、宮崎・藤永編 2006）[5]。また、平瓶は細片のみ現存しており全体的な特徴は不明だが[6]、平瓶の出現はTK209型式以降とされている（田辺 1966、中村 2001）。

上述の遺物からみた年代観は須恵器、勾玉、切子玉、馬具類ではおおむね矛盾しない。管玉の製作時期のみ他の遺物よりさかのぼるが、欠けた成品を再研磨して使用していることからも伝世品の可能性がある。なお、須恵器に関してはTK43型式新段階からTK209型式古段階の特徴にあたるものが確認でき、多少の時期幅が想定できる[7]。（下江）

６．おわりに

高蓋塚谷古墳は戦後食糧難の際に開墾のため消滅した。しかし、神石高原町立歴史民俗資料館、および広島県立歴史博物館に所蔵されていた高蓋塚谷古墳出土遺物とその関連資料から、これまで注目されてこなかった神石高原町旧三和町域の古墳文化の一端を明らかにしえたといえる。発掘時の私信や豊元國氏の献身的な調査記録がこの神石高原町有数の後期古墳の存在を伝える貴重な情報となった。

これらの調査活動から、高蓋塚谷古墳は少なくとも全長７ｍ以上となる横穴式石室を内包していたこと、残された遺物の集合写真（第４図）からもおそらくはTK43型式新段階ごろ

に築造された古墳であること、吉備地域に特有な瓢形環状鏡板付轡を保有するだけでなく、鐙や雲珠、鍔付大刀を持つことからも、備後地域でも有数の首長墳であることを示す証拠を得ることができた。とくに瓢形環状鏡板付轡についてはその分布域が吉備地域に偏在することから、吉備地域の先進的な渡来系工人の受容とともに、当該地域において開始された馬具生産を想定する意見（大谷 2008）もある。吉備地域においてはじめて２組共伴したことも注視すべき事例といえる。大谷宏治氏が言うように、瓢形環状鏡板付轡を保有した被葬者が吉備地域を中心とした製鉄・鍛冶集団との関わりを示すものであるかはいまだ不明な部分も多い。しかし、高蓋地区の西方20㎞には、古墳時代後期の製鉄遺跡として著名な世羅町カナクロ谷製鉄遺跡（藤野・土佐 1983）がある。高蓋塚谷古墳は備後地域において古墳時代製鉄が開始される段階[8] に造営されることから、その被葬者は製鉄あるいは鍛冶に関与したと想像することも強ち否定はできないのではなかろうか。

現地では、西方に開口する横穴式石室が存在した地点を確認できたが、周囲の斜面の状況から直径15m前後の円墳を想定することができたものの、横穴式石室の詳細な構造については明らかにはしえなかった（写真図版第１上）。雲珠や馬具の付属品、鉄鏃やそのほかの須恵器類など、所蔵不明となった出土遺物もいまだに多いことは残念ではある。

広島県立歴史博物館や土地所有者の瀬尾澤代氏らのご指導、ご協力により、これまで公開されてはいなかった豊元國氏の実測図や撮影写真、私信記録略図の一部を掲載させていただくことができた。今回の紹介に関わり、府中高校地歴部関係者にもご連絡いただくなど御便宜をはかっていただいた。また、瀬尾氏には、現地での説明だけでなく、所在地の撮影と写真掲載に快く了解をいただいた。記して感謝したい。さらに、旧豊松村域（現神石高原町豊松）の考古資料を丹念に収集された井平軍治氏のコレクションを紹介した（野島･真木･佐々木･名村 2017）際と同様、神石高原町教育委員会には格別のご高配を賜った。ともにあらためて感謝したい。脇坂光彦氏の紹介（脇坂 1978）も重要な指針となった。旧三和町域では、精微な格子目叩きの調整痕をもつ瓦片も採集されていることから、寺院などの存在の可能性も探っていかねばならないと考える。

なお、今回の資料紹介は2018・2019年度大学院文学研究科考古学研究室の資料実習授業における遺物観察・実測、写真撮影をもとにし、神石高原町の委託研究費を一部使用した。広島県立歴史博物館の学芸員森本とともに、野島の指導のもと、実習授業に参加した大学院生の藤澤昌弘と下江裕貴が実務を行った。第１・２・６節は野島、第３節は森本と野島、第４・５節は森本・藤澤・下江がおもに執筆し、野島が全体の文体を調整した。　（野島）

註

(1) 戦後、食糧難だったことから、畑地を増やすために塚を削平したらしい。瀬尾澤代氏が寄贈された資料のなかには中国ジュニア新聞の切り抜き記事のコピーがあり、それによると、1949（昭和24）年５～６月頃に発掘され「土器、刀剣、曲玉、くつわ、耳輪（ママ）」が出土したことを報じている。日本考古学協会内に古墳調査特別委員会が置かれ、広島県下の基本調査が行われた時期にかさなる（井上 2015）。

(2) 神石高原町教育委員会と広島大学考古学研究室において遺物借り出しの覚え書きを取り交わし、神石高原町教育委員会教育課教育係長吉田浩子氏、同教育課主事横山千恵氏の立会いのもと、広島大学大学院文学研究科教授野島永、同大学院生名村威彦、真木大空が遺物の梱包、運搬を行い、2018年３月７日に広島大学大学院文学研究科に搬入し、2018・2019年度に遺物整理を行った。

(3) ガリ版刷りの原著には「吉本龍代」と書かれた上から､マジックで「重森孝二郎」と上書きされている。原著者は略図も含め、吉本氏であろう。

(4) 2014年には、1946年に府中高校豊元國氏らが調査した福山市二塚古墳の馬具などが九州国立博物館で開催された全国高等学校考古名品展に出品された（九州国立博物館編 2014)。

(5) 現存確認ができてはいないものの、出土遺物の一括写真（第４図）では、21より口径が大きく、TK43型式新段階かと考えられる坏身も確認できる。

(6) 出土遺物の一括写真（第４図）に写っている平瓶は体部が丸みを帯び、口縁部の取り付けが体部の中心に近いことから、やや古相の特徴を示す。

(7) 出土遺物の一括写真（第４図）や豊元国氏の実測図では､轡が２組確認できた。須恵器の時期幅に加えて、高蓋塚谷古墳の横穴式石室の規模では、１人当たり２組以上の馬具類を副葬している例は少ないことからも、追葬が行われた可能性があろう。

(8) 備後北部では６世紀中頃、南部でも６世紀後半までには古墳時代の製鉄が開始されたとみることができる（安間 2018)。

引用・参考文献

秋山浩三　1988 「土器（各論－評価と問題点)」『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書第23集、向日市教育委員会、235～245頁。

新井真吾　1999 『金田第２号古墳発掘調査報告書』（財）広島県埋蔵文化財調査センター、21・30頁。

安間拓巳　2018 「古代・中世の鉄・鉄器生産」『芸備』広島県の考古学、第50号、備後友の会、133～146頁。

伊藤悊爾　1927 『神石郡誌』神石郡教育委員会。

井上　弘　2015 「豊 元國と府中高校地歴部」『古代文化』第67巻第２号、古代学協会、124～132頁。

梅本健治編　1987 『銭神第２・４・５号古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第59集。

大賀克彦　2009 「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』古代出雲における玉作の研究Ⅲ、島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、9～62頁。

大賀克彦　2013 「玉類」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学４、同成社、147～159頁。

大谷宏治　2008 「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40号 静岡県考古学会、201～214頁

尾上元規　2002 「壺鐙と瓢形円環轡について」『環瀬戸内海の考古学 －平井勝氏追悼論文集－』下巻、古代吉備研究会、333～340頁。

河瀬正利編　1989 『朝日ゴルフクラブ広島コース建設予定地内遺跡発掘調査概要』塚土古墳発掘調査団。

九州国立博物館編　2014 『真夏のトピック展示 全国高等学校考古名品展』大同印刷株式会社。

斎藤　弘　1986 「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号、PHALANX －古墳文化研究会－、47～53頁。

神石高原町　2010 『広報 神石高原』４月号、No.66。

田辺昭三　1966 『陶邑古窯址群』Ⅰ、平安学園考古学クラブ。

豊　元國編　1954 「廣島縣古墳綜覧 昭和28年10月現在」『三ッ城古墳』廣島縣文化財調査報告第１輯、廣島縣教育委員會、65～171頁。

中久保辰夫　2018 「土師器直口壺と古墳時代土器の特質」『待兼山考古学論集』Ⅲ、大阪大学考古学研究室、315～326頁。

中村　浩　2001 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
西川　宏　1953 「神石郡の古墳についての覚書」『芸備地方誌研究』No.3、芸備地方誌研究会、1～6頁。
野島　永・真木大空・佐々木尚也・名村威彦　2017 「広島県神石高原町出土遺物の資料紹介 －旧豊松村域出土の井平コレクション－」『広島大学大学院文学研究科 広島大学考古学研究室紀要』第９号、広島大学考古学研究室、69～102頁。
畑　信次・高田荘爾・小野多恵　2006 『二子塚古墳発掘調査報告書』福山市教育委員会、61頁、78頁。
藤野次史・土佐雅彦　1983 「カナクロ谷製鉄遺跡」潮見 浩編『中国地方製鉄遺跡の体系的研究』広島大学考古学研究室、40～56頁。
宮崎泰史・藤永正明編　2006 『年代のものさし －陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館。
米田克彦　2009 「穿孔技術から見た出雲玉作の特質と系譜」『出雲玉作の特質に関する研究』古代出雲における玉作の研究Ⅲ、島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、93～126頁。
脇坂光彦　1978 「神石郡三和町塚谷古墳について（府中高校所蔵資料の紹介⑥）」『地歴』第６号、広島県立府中高等学校地歴部、1～7頁。
渡辺智恵美　1997 「耳環小考 －製作技法､材質から見た分類－」『元興寺文化財研究所創立三十周年記念誌』元興寺文化財研究所、73～83頁。

Takafuta-Tsukatani Mounded Tomb, Jinseki-kōgen Town, Hiroshima Prefecture

Hisashi NOJIMA, Naoto MORIMOTO, Masahiro FUJISAWA, Hiroki SHIMOE

Takafuta-Tsukatani mounded tomb (*kofun*) was located in Jinseki-kōgen Town, Hiroshima Prefecture. However, immediately after World War II the site was reclaimed as farmland and the mound disappeared. In 2010, some of the finds unearthed by the landowner of the tomb were donated to Jinseki-kōgen Town. Furthermore, other relics from the Takafuta-Tsukatani mounded tomb were also held at the Hiroshima Prefectural Fuchū High School, but are now in the possession of the Hiroshima Prefectural Museum of History. In this article, all unearthed finds are presented in their entirety.

Takafuta-Tsukatani mounded tomb was built during the Late Kofun period (latter half of the 6th century A.D.). Many objects were unearthed, including iron swords, a hand guard of a sword (*tsuba*), horse bits (*kutsuwa*), stirrups (*abumi*), beads of necklaces, Haji ware (*hajiki*), and Sue ware (*sueki*). In particular, horse bits with gourd-shaped iron rings (*hisagogata kanjō kagami itatsuki kutsuwa*) are characteristic for mounded tombs in the Kibi region (ancient province consisting of Okayama Prefecture and the eastern part of Hiroshima Prefecture). In the latter half of the 6th century the first iron manufacture sites appeared in the Bingo region (eastern part of Hiroshima Prefecture). It is highly probable that the person buried in the Takafuta-Tsukatani mounded tomb was involved in horse harness and trappings production, iron manufacture and blacksmithing unique to the Kibi region.

第１表　高蓋塚谷古墳出土遺物観察表（玉類）

掲載番号	種類	器種	時期	法量(cm) 長さ［現存値］	幅［現存値］	厚さ［現存値］	重さ(g)［現存値］	備考
4	装身具	耳環	不明	[2.5]	[2.6]	[0.4]	[4.0]	神石高原町　(TTK1)
5	装身具	耳環	不明	[2.5]	[2.7]	[0.4]	[4.5]	神石高原町　(TTK2)
6	玉類	勾玉	古墳後期	2.2	1.4	0.8	3.0	神石高原町（TTK10)
7	玉類	勾玉	古墳後期	3.5	2.0	1.1	9.2	神石高原町　(TTK7)
8	玉類	勾玉	古墳後期	3.2	2.1	0.8	6.8	神石高原町　(TTK8)
9	玉類	勾玉	古墳後期	[1.8]	[2.0]	[1.0]	[4.0]	神石高原町　(TTK9)
10	玉類	管玉	古墳後期前半	2.1	1.1		[4.5]	神石高原町　(TTK4)
11	玉類	管玉	古墳後期前半	2.2	0.9		[3.2]	神石高原町　(TTK3)
12	玉類	管玉	古墳後期前半	2.2	1.0		[4.0]	神石高原町　(TTK5)
13	玉類	管玉	不明	[2.5]	0.9		[2.2]	神石高原町　(TTK6)
14	玉類	切子玉	古墳後期後半	2.7	1.7		9.5	神石高原町（TTK13)
15	玉類	切子玉	古墳後期後半	2.4	1.7		7.0	神石高原町（TTK12)
16	玉類	切子玉	古墳後期後半	2.0	1.7		6.0	神石高原町（TTK11)
17	玉類	切子玉	古墳後期後半	2.2	1.3		4.0	神石高原町（TTK15)
18	玉類	切子玉	古墳後期後半	2.2	1.2		4.0	神石高原町（TTK14)

第２表　高蓋塚谷古墳出土遺物観察表（土師器・須恵器）

掲載番号	種類	器種	時期	法量(cm) 器高［現存値］	口径	器径	色調 外面	内面	備考
19	土師器	直口壺	古墳後期	13.8	9.6	12.0	5YR7/6	5YR7/6	神石高原町（TTK21)
20	須恵器	坏蓋	TK209型式	4.6	13.2	13.8	10Y8/1	10Y8/1	神石高原町（TTK16)
21	須恵器	坏身	TK209型式	4.6	11.6	14.1	10Y8/1～10Y5/1	10Y7/1	神石高原町（TTK17)
22	須恵器	坏蓋	TK43型式	3.5	14.1	13.9	7.5YR3/1	7.5YR4/1	広島県立博物館（番号315)
23	須恵器	坏蓋	TK43型式	3.6	13.8	14.2	10YR7/1	10YR6/1	広島県立博物館（番号316)
24	須恵器	坏蓋	TK43型式	5.8	14.3	15.0	7.5YR5/1	7.5YR6/1	広島県立博物館（番号318)
25	須恵器	短頸壺	不明	6.7	4.4	9.2	7.5YR6/1	5YR6/2	広島県立博物館（番号317)
26	須恵器	坏身	不明	[2.1]			10YR4/1	10YR4/1	広島県立博物館（番号323)
27	須恵器	平瓶	不明	[1.0]			10Y5/1	N4/1	神石高原町（TTK20)
28	須恵器	甕	不明	[10.5]			10YR4/1	10YR5/1	広島県立博物館（番号319)
29	須恵器	甕	不明	[4.3]			5Y7/2	7.5Y6/1	神石高原町（TTK18)
30	須恵器	甕	不明	[4.5]			2.5Y5/1	2.5Y4/1	広島県立博物館（番号320)
31	須恵器	甕	不明	[3.9]			10YR5/1	10YR5/1	広島県立博物館（番号322)
32	須恵器	甕	不明	[5.1]			10Y5/1	7.5Y7/1	神石高原町（TTK19)
33	須恵器	甕	不明	[3.8]			2.5Y5/1	2.5Y5/1	広島県立博物館（番号321)

高蓋塚谷古墳　　図版第１

ａ．高蓋塚谷古墳跡近景（西から）（破線部分が推定位置）

ｂ．高蓋塚谷古墳現存遺物（土師器・須恵器・玉類・耳環・鍔）

高蓋塚谷古墳

図版第２

ａ．高蓋塚谷古墳出土鍔

ｂ．高蓋塚谷古墳出土轡

ｃ．高蓋塚谷古墳
出土直口壺

高蓋塚谷古墳

図版第３

ａ．高蓋塚谷古墳
出土坏蓋

ｂ．高蓋塚谷古墳
出土坏身

ｃ．高蓋塚谷古墳
出土坏蓋

高蓋塚谷古墳

図版第４

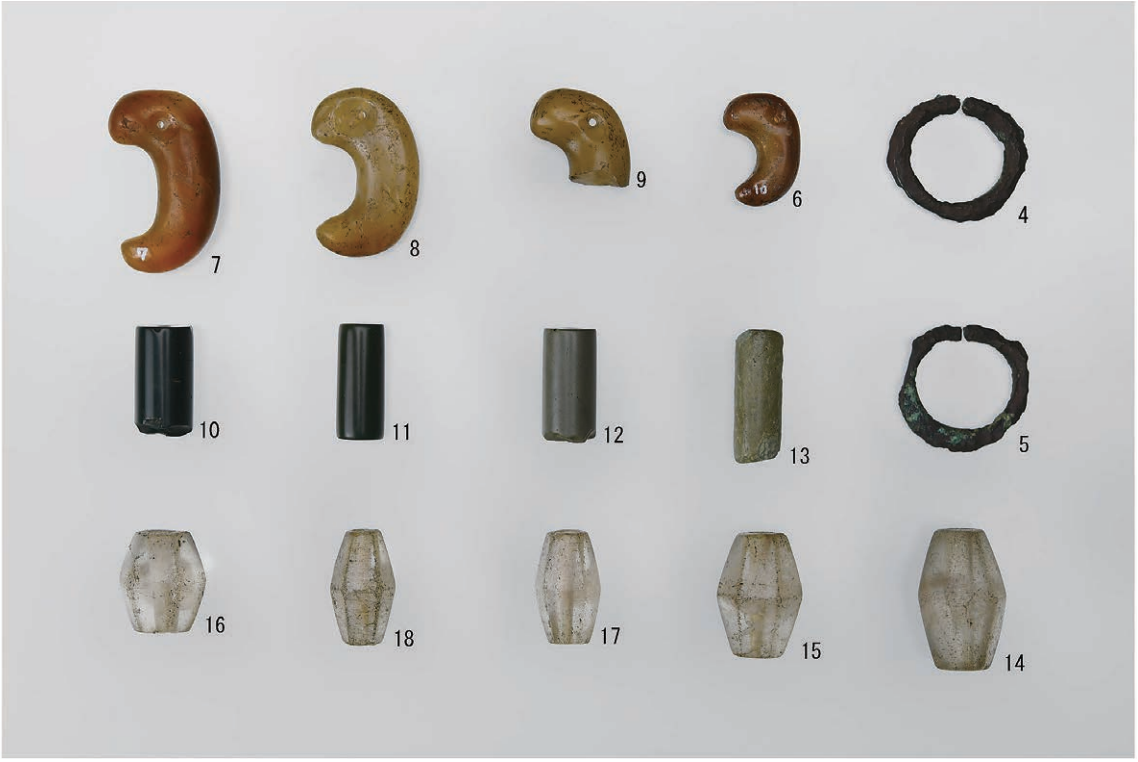
ａ．高蓋塚谷古墳
出土坏蓋

ｂ．高蓋塚谷古墳
出土坏蓋

ｃ．高蓋塚谷古墳
出土短頸壺

高蓋塚谷古墳図　　図版第５

ａ．高蓋塚谷古墳出土須恵器



ｂ．高蓋塚谷古墳出土装身具類